四日市看護医療大学紀要，vol. 16，No. 1，2023

〈研究報告〉

新型コロナウイルス流行下における在宅看護学実習に対する学生の学習経験と主観的評価に関する研究

― 2021 年度の履修者に焦点をあてて ―

春名　誠美*，清水　智子**，北井　真紀子*，多次　淳一郎*

Students' Experiences and Subjective Evaluations of Home Care Nursing Practicum During the COVID-19 Pandemic

― Focus on students in 2021 ―

Haruna Shigemi *, Shimizu Tomoko **, Kitai Makiko *, Taji Junichiro *

要　　約

2021 年度の在宅看護学実習を履修した学生の実習経験と主観的評価を把握する目的で無記名自記式アンケート調査を実施した．対象となる 108 名中 43 名（39.8%）から有効回答を得た．《臨地実習日数》別の比較では〈5 日以上〉群が〈4 日以下〉群よりも療養者や家族との《コミュニケーション》の満足度が有意に高かった（p ＜ .01）．また，《同行訪問件数》別の比較では〈3 件以下〉群で《看護計画の実施》の満足度が〈4 件以上〉群よりも有意に高かった（(p ＜ 02）．自由記述では，実習で工夫した点として「話し合い学びを深めた」「イメージし考える」「相談して解決」等 15 記述、困難に感じた点として「自分で経験して学びたかった」等の 9 記述がみられた．この結果から，臨地での経験が制約される状況下でのコミュニケーションの熟成には一定日数以上，複数回の臨地実習が実習に対する満足度を高め、一方，看護計画の実施においては日数および件数を絞りつつも一事例に丁寧に取り組むことが学生の満足度を上げ，学生の能動的な学習の促進に寄与する可能性が示唆された．

Key Words：COVID-19（COVID-19），在宅実習（Home Care），学習経験（Nursing Practicum-Experiences），主観的評価（Subjective Evaluations），学生（Student）

Ⅰ．はじめに

2020（令和 2）年の新型コロナウイルス感染症（Corona Virus Infected Disease；COVID-19）の感染拡大により，看護実習が実施不可もしくは大幅に制限される期間が続いている．実習の制限という未曽有の事態が対人関係を基盤とする看護という営みを学ぶ上でどのような影響を及ぼすかを記述・検証することは今後の看護基礎教育の在り方を検討する上で重要と考える．

我々は，2020 年度の四日市看護医療大学（以下，本学と略す）の在宅看護学実習を履修した学生を

*四日市看護医療大学
*Yokkaichi Nursing and Medical Care University
**金城学院大学
**Kinjo Gakuin University

対象として，彼らの実習経験内容と主観的な学習効果および満足度を記述し，あわせて相互の関連を検討する目的でアンケート調査を行った．その結果，平時よりも経験量を絞りつつも，臨地での経験を確保すること，不安の軽減，限られた経験の中での有意義な学びの促しが重要であることが示唆された[1]．しかしその後もCOVID-19の流行は断続的に続き，看護学実習の制約・制限は継続している．特に2021（令和3）年度に領域別実習を履修した学年は，前年度の基礎看護学実習を臨地に出向くことができなかった世代であり，COVID-19の影響を最も強く受けた世代ともいえる．今後，COVID-19の予防・治療法が確立されていく中で一旦は看護学教育も元のあり方に回帰していくものと予測されるが，将来，新たな感染症の流行によって急遽，教育活動が制限される可能性はある．そのため，COVID-19の流行時期に基礎看護学教育のどの段階を過ごしたかを考慮に入れ，丁寧に学習への影響を記述しておくことの意義は大きいと考える．そこで，2021年度に在宅看護学実習を履修した学生の実習での経験とその主観的評価を調査し，2020年度の結果[1]とも比較することで，COVID-19の複数年度単位での学習への影響を考察する目的で本研究を計画した．

Ⅱ．2021年度在宅看護学実習の概要と実施状況

COVID-19の流行状況に応じて刻々と変化する大学の警戒レベル，実習施設の受け入れ状況に即応できるよう，令和2年度に作成した大学，施設それぞれの対応レベルに合わせた3つの実習パターン（表1）および実習目標（表2）を令和3年度も踏襲し，実習を展開した．

2021年度の実習履修者は108名で，1グループ12名ずつの9グループ編成で実習を展開した．このうち，8つのグループは臨地実習（パターン①）を適用し，1つのグループのみ学内実習（パターン②）を適用した．遠隔実習（パターン③）を適用したグループはなかった．臨地実習（パターン①）では，感染対策の観点から訪問看護ステーション1か所あたりの配置人数は1〜4名，1日あたりの臨地に出向く人数を2名以内に抑え，その他は学内に振り替え，合計で学生1人あたりの臨地実習日数は8日以内になるように調整した．学生の学習方法としては1事例を受持事例として担当し看護過程を展開するとともに，可能な場合は受持事例以外の複数の事例についても同行訪問を行った．実習期間中に2回の臨地カンファレンスと最終日の学内カンファレンスを通じて，自己の学びを整理・発表し，討議を通じてその深化・統合を図った．

表1　警戒カテゴリーに合わせた実習パターン

パターン①　臨地実習で，療養者宅での実施が可能
パターン②　学内実習または臨地実習
パターン③　遠隔実習

表2　令和2年度　在宅看護学実習目標

1. 在宅療養者と家族を国際生活機能分類（ICF）の視点でとらえ，療養上の問題を抽出できる．
2. 在宅療養者と家族の意向を踏まえて目標を設定し，看護計画を立案できる．
3.–1）看護計画に基づき，ケアの一部が実践できる．（パターン①） –2）看護計画に基づき，学内でケアの一部を模擬実践できる．（パターン②） –3）看護計画に基づき，ケアの一部について，その方法・手順や媒体などを考えることができる．（パターン③）
4. 事例を通じて，在宅療養を支える保健医療福祉制度やサービスがわかる．
5. 地域包括ケアシステムと看護の機能・役割を考えることができる．

Ⅲ．研究方法

1. 研究デザイン

横断的相関研究

2. 調査対象者

2021 年度に本学の在宅看護学実習履修者で研究参加に同意が得られた者.

3. 調査方法

クラウド型のアンケートソフトである Microsoft Forms を用いた無記名自記式アンケート調査を行った．回答可能期間は実習最終日の学内カンファレンス終了後からその週末（日曜日）の 17：00 までとした.

4. 調査項目

【実習での経験】,【学習の到達度】,【実習の満足度】,【実習目標達成のための自分の工夫・実習展開するうえでの困難】の 4 群 19 項目で構成した.【実習での経験】は《臨地実習の日数》《同行訪問件数》等の 4 項目,【学習の到達度】は実習目標の 5 項目.【実習の満足度】は,《看護過程の展開》,《カルテからの情報収集》,《療養者や家族とのコミュニケーション》,《看護計画の実施（媒体作成・実技など)》,《初日のオリエンテーション》,《毎日のカンファレンス》,《中間 CF》および《最終 CF》の 8 項目とした．それぞれ「4：満足・3：やや満足・2：やや不満足・1：不満足」の 4 件法で回答を求めた.【実習目標達成のための自分の工夫・実習展開するうえでの困難】は自由記述で調査した.

5. 調査期間

2021 年 9 月～2022 年 3 月

6. 分析方法

【実習の経験】の《臨地実習の日数》が〈0～4 日〉〈5 日以上〉の 2 群,《同行訪問件数》〈4 件未満〉〈4 件以上〉の 2 群にそれぞれ分け,【学習の到達度】【実習に対する満足度】の各項目について Mann-Whitney-U 検定を行った．分析には IBM SPSS-Statistics 25.0® を使用した.

7. 倫理的配慮

実習最終日の学内カンファレンス終了後に依頼文書を配布し，口頭で，研究目的と方法，調査への参加は自由意志であり，研究参加しないことでの不利益は被らないこと，個人が特定されることはないこと，データの守秘を厳守すること，データは研究目的以外に使用しないことを説明した．アンケートに回答することをもって同意とみなした．アンケート（Forms）の配信，回収および匿名化は在宅看護学実習の成績評価に関与しない研究メンバーが担当し，関与したメンバーは実習成績が確定後にデータの共有を受けた．本研究は，四日市看護医療大学倫理委員会の承認（承認 No.150）を得て実施した.

Ⅳ．結　　果

1. アンケートの配信者数と回答数

実習履修者 108 名のち 43 名から回答を得て，その全てが有効回答であった（回答率，有効回答率ともに 39.8%）.

2. 臨地での経験（表 3・表 4）

《臨地実習日数》は〈4 日以下〉が 20 名（46.5%），〈5 日以上〉が 23 名（53.5%）であった.《同行訪

表 3　臨地での実習日数

n=43

	n	%
4 日以内	20	*46.5*
5 日以上	23	*53.5*

表 4　訪問件数

n=43

	n	%
4 件未満	21	*48.9*
4 件以上	19	*44.2*
無回答	3	*6.9*

問件数》は〈4 件以下〉は 21 名（48.9%），〈5 件以上〉19 名（44.2%）であった．

3. 臨地実習日数と学生の主観的評価との関連（表 5）

《臨地実習日数》を〈4 日以下〉と〈5 日以上〉の 2 群間で比較を行った結果．〈5 日以上〉の群の方が《コミュニケーション》の項目で【実習の満足度】が有意に高かった（p=0.010）．【学習の到達度】では有意差を認める項目はなかった．

4. 同行訪問件数と学生の主観的評価との関連（表 6）

《同行訪問件数》が〈3 件以下〉と〈4 件以上〉の 2 群間で比較を行った結果，〈4 件以上〉のほうが《看護計画の実施》について【実習の満足度】が有意に低かった（p=0.020）．【学習の到達度】では有意差を認める項目はなかった．

5. 実習に対する工夫・困難の内容（表 7）

自由記述は《工夫した点》として，15 記述あった．内容は，「わからないことは，看護師に聞いたり，メンバーと話し合い学びを深めた（3）」「訪問件数が少ない分，カルテを読み込み，できる限り想像力を働かせてイメージし，療養者の環境や援助について考えるようにした（3）」「不安やわからない事は，先生やメンバー，看護師に相談して解決していった（3）」がそれぞれ 3 記述と多かった．《困難に感じた点》は，9 記述あった．内容は，「自分で経験して学びたかったが，療養者・家族から直接お話を聞き，援助を行うことができなかった（4）」といった記述が最も多かった．

V．考　　察

今回の結果では，〈5 日以上〉臨地で実習を行った学生のほうが「療養者や家族とのコミュニケーション」の満足度が有意に高かった．当時は接触感染・飛沫感染が主要因と考えられ，訪問は受け持ちのみとし，接触も最小限にすることを望む事

表 5　臨地での実習日数別にみた学生の実習目標の到達度と実習の満足度

		4 日以下（n=20）		5 日以上（n=23）		p 値	
		Mean	SD	Mean	SD		
実習目標の到達度	目標 1	3.35	0.489	3.43	0.507	0.58	n.s.
	目標 2	3.15	0.489	3.26	0.541	0.47	n.s.
	目標 3	3.30	0.470	3.35	0.487	0.74	n.s.
	目標 4	3.15	0.671	3.17	0.491	0.98	n.s.
	目標 5	3.00	0.649	3.26	0.619	0.19	n.s.
実習の満足度	実習全体	3.45	0.510	3.65	0.487	0.19	n.s.
	カルテからの情報収集	3.60	0.503	3.74	0.449	0.34	n.s.
	コミュニケーション	2.80	0.696	3.35	0.573	0.01	*
	看護計画の実施	3.20	0.523	2.87	0.548	0.05	n.s.
	施設 OR	2.50	1.539	3.17	1.230	0.08	n.s.
	学内 CF	3.20	0.510	3.09	0.848	0.87	n.s.
	臨地中間 CF	3.45	0.510	3.35	0.936	0.88	n.s.
	臨地最終 CF	3.05	1.145	3.35	1.207	0.22	n.s.

Mann-Whitney の U 検定　*：p<0.05　n.s.：not significant

表６　件数別にみた学生の到達度と満足度

		3 件以下（n=21）		4 件以上（n=19）		p 値	
		Mean	SD	Mean	SD		
実習目標の到達度	目標 1	3.43	0.58	3.37	0.50	0.748	n.s.
	目標 2	3.24	0.54	3.16	0.50	0.688	n.s.
	目標 3	3.33	0.48	3.32	0.48	0.936	n.s.
	目標 4	3.29	0.64	3.05	0.40	0.236	n.s.
	目標 5	3.10	0.62	3.21	0.63	0.611	n.s.
実習の満足度	実習全体	3.52	0.51	3.58	0.51	0.768	n.s.
	カルテからの情報収集	3.71	0.46	3.63	0.50	0.668	n.s.
	コミュニケーション	3.05	0.59	3.21	0.71	0.452	n.s.
	看護計画の実施	3.24	0.54	2.74	0.45	0.020	＊
	施設 OR	2.81	1.47	2.79	1.44	0.564	n.s.
	学内 CF	3.05	0.80	3.11	0.66	0.872	n.s.
	臨地中間 CF	3.29	0.90	3.42	0.61	0.199	n.s.
	臨地最終 CF	3.14	1.15	3.26	1.10	0.845	n.s.

Mann-Whitney の U 検定　＊：p <0.05　n.s.：not significant

表７　記述内容

実習目標到達のために自分で工夫したこと（15 記述（ ）内は記述数）
・わからないことは，看護師に聞いたりメンバーと話し合った（3）
・カルテを読み込み，事例のイメージを持ち，療養者の環境や援助について考えた（3）
・事前に内容を決め質問するようにした（2）
・声かけを中心に意識した（1）
・療養環境を観察することで，療養者の好きなものや生活について捉えた（2）
・不安やわからない事は，先生やメンバー，看護師に相談した（3）
・介護者に積極的に話しかけ，ケアも実践させてもらうようにした（1）
実習を展開するうえで困難に感じたこと（9 記述（ ）内は記述数）
・自分で経験して学びたかったが，療養者・家族から直接お話を聞き，援助を行うことができなかった（4）
・ケアができない（1）
・カンファレンスに慣れておらず，ディスカッションが上手く行えなかった（1）
・療養者とのコミュニケーション（1）
・実習初日の情報収集のみの状態で情報シートと関連図を仕上げなければならない（1）
・紙での事例展開では，実際の療養者の生活がイメージしづらかった（1）

業所もあった．また，COVID-19 で，療養する人や家族とのコミュニケーションの機会が制限されており，学生らにとってまずは一定の場数を踏めることが必要であったのではないかと考えられる．訪問件数では〈4 件以上〉になると〈3 件以下〉よりも《看護計画の実施》に関して満足度が有意に低かった．在宅看護学実習では受け持ち以外の利用者の訪問にも同行する．施設によっては 1 日 3, 4 件の同行をする場合もある．在宅領域で用いている実習日誌は，同行訪問する受け持ち以外の療養者についても事例毎に訪問状況の記載，考察をさせる．そのため，受け持ち事例の看護計画の立案と実施のみに集中することが難しい状況が生じやすく，訪問件数の多さが看護計画実施の満足度を下げる一因になったのではないかと考える．

臨地実習日数と訪問件数はある程度，相関するため，コミュニケーションの観点からみると経験量の確保が有効である反面，看護師としての思考やケア実践まで拡げてみた場合には，やみくもに経験量を増やすことで学生の“処理能力”を超え，受け持ち事例の看護計画に十分な時間を確保できないことにつながり，結果として満足度の差として現れたのではないかと考える．

COVID-19 流行による社会活動の制限は時々刻々変化しており，今回の結果はその前段での授業や学内演習，基礎看護学等の実習の実施状況を勘案して解釈する必要がある．筆者らが 2020 年度に実施した今回と同様の調査[1]についてみると，その対象であった学生は 2 年次の基礎臨地実習を経験できており，その結果として「臨地日数および件数を絞りつつも一事例に丁寧に取り組むことで，学生の満足度が高い」という結果を得た．今回の調査の対象であった学年は基礎看護学実習を遠隔で実施しており，コミュニケーションの満足度が年度間で異なった理由の 1 つとして，2 年次の経験量の差が関連したのではないかと考える．この対人援助の基盤となるコミュニケーションの経験量が十分でなかったことで，複数の事例を同時にこなすこと自体が負荷となり，受け持ち事例の看護計画の展開への満足度にも影響したのではないかと考える．これらをふまえると，2 年次までの臨地経験を考慮に入れ，経験させる量を考慮・調整することで学生の満足度を高めることにつなげられるのではないかと考える．

次に，記述から実習に対し工夫した点として，「わからないことは，看護師に聞いたりメンバーと話し合い学びを深めた」「訪問件数が少ない分，カルテを読み込み，できる限り想像力を働かせてイメージし，療養者の環境や援助について考えるようにした」などの記述が多くみられた．学生らは，看護師からの説明ややり取りから理解を深め，自分と異なる学生の視点や価値観から気づき，ディスカッションから経験を深めたのではないかと考える．一方，困難に感じた点においては「自分で経験して学びたかったが，療養者・家族から直接お話を聞き，援助を行うことができなかった」といった記述が多かった．臨地経験での学びを実現できないという率直な学生の不全感であると考える．我々は同行訪問の補完として，可能な限り施設内でのカルテ閲覧およびスタッフとのやり取りができるよう実習ステーションと調整を図った．また学内においては，受け持ち事例の状況を再現しケア実践を行うことで目標の達成とし，加えて療養者の生活圏の地区踏査を取り入れることで，生活地域からの療養者への理解を深めた．しかし，学生らにとっては，療養者や家族とのやり取りから得られるケアの効果は実感しにくく，「経験したかった」「イメージしづらい」というのは率直な評価であると考える．

菱沼[2]は「看護実践の体験は，健康課題に直面している病者との関係のなかからしか得られない」と述べている．在宅看護実習は，住まうくらしの場に出向き対象を理解し，看護課題を考える．このような在宅看護学臨地実習の特徴を踏まえると，臨地での実習経験の確保は重要であり，今回の結果からも，一定の期間複数回訪問することは，学生の満足度・学習への到達度につながる教育的効果があると考える．

菱沼[3]は，今後の実習提案の一つに「たとえ感染症が発生していてもプレ医療職として学生を受け入れ，看護を体感させてほしいと思う．看護を体験し，看護を考える時間を，基礎教育期間中に

与えたい.」と述べている.

我々も，2020 年と 2021 年，学習経験の違う学生らを対象に在宅看護学実習を履修した学生の実習経験とその主観的評価の調査から，臨地経験がいかに学生への学習到達度や実習満足度に影響しているかを考えることができた．今後も実習でしか学べない教育効果を高めるため，学生らの実習経験から学習到達度，実習満足度の実感できる実習体制を構築していくことが重要と考える.

Ⅵ. 本研究の限界と今後の課題

本研究は，自由意思で参加した学生の主観的評価であり，回収率も 39.8%に留まった．そのため在宅看護学実習履修者全体の評価は反映されておらず，結果の解釈には留意が必要である．しかし，学生の忌憚ないデータであり，学生自身が抱く主観的評価を鑑みつつ今後も貴重な学びの場である臨地実習の組み立てを行ってくことが重要である.

Ⅶ. 結　　論

COVID-19 流行に伴い，様々な制限がある状況下で実施した在宅看護学実習に対する履修学生の主観的評価を把握する目的で，無記名自記式アンケート調査を実施した．その結果，臨地経験のない状況下では，コミュニケーションを熟成させるには一定日数以上，複数回，臨地での事例に関わり，計画実施においては一事例に丁寧に取り組むことが，学生の満足度が高いことが示唆された.

謝　　辞

本研究の実施にあたり，調査にご協力いただきました学生の皆様に感謝申し上げます.

文　　献

1）春名誠美，森智子，北井真紀子他：新型コロナウイルス感染症流行下における在宅看護学実習に対する学生の学習体験と主観的評価に関する研究，四日市看護医療大学紀要，15（1），25-31，2022.
2）菱沼典子：COVID 19 は看護学教育を変える 臨地実習再考：聖路加看護学会誌，24（1–2），37–39，2021.
3）菱沼典子：第 4 回三重看護研究会学術集会（基調講演）臨地・臨床と教育機関の連携協働による看護実践の創造～コロナ禍でも逞しく学び，働く～，三重看護研究会，第 4 回三重看護研究会学術集会抄録集，1，2022.
4）壬生寿子，日當ひとみ，田向たまき：COVID-19 の影響を受け実施した在宅看護学内実習と今後の課題，八戸学院大学紀要，63，83–92，2021.
5）岡田麻里，片山陽子，諏訪亜季子：対話型オンライン学修を用いた在宅看護学実習の取り組みと評価―COVID-19 感染予防対策を契機に実装した教育システム発展のために―，香川県立保健医療大学雑誌，12，57–65，2021.
6）小野若菜子，竹森志穂，西村恵里奈他：新型コロナウイルス感染症の影響によるオンラインでの在宅看護実習における教育活動報告，聖路加国際大学紀要，No8，18–23，2022.